

# 仏教に学ぶ保育の原点

仏教文化研究所兼任研究員 佐藤 達全

## 一、私の仏教との関わり（自己紹介を兼ねて）

私は群馬県内にある曹洞宗寺院の住職をしていた父の長男として生まれました。大正生まれの父は私を後継者と決めていたため、駒澤大学で仏教学（禅学・宗教学）を学ぶことになりました。子どもの頃から田舎の葬式や法事の古いシキタリを見ていたため、大学入学当初は仏教に対する関心は低かったのですが、ある先生のお話を伺って「人間の生き方」を探究する教えであることを知り、興味が湧いてきました。

特に、宗教が人の考え方や生き方に及ぼす影響に関心を持って、大学院の博士課程を修了し、郷里に帰って家政科の短期大学に四年間勤務した後、保育系の短期大学に移って今年で三十八年目です。住職をしていた父が八年前に遷化したため、その後を継いで住職になりました。さらに、六十年ほど前に父が創立した保育園の理事長もしながら、現在も短大で保育や幼児教育に関する授業を担当しています。

ところで、私が仏教保育と関わるようになるご縁をいただきましたのは、公益社団法人・日本仏教保育協会の機関誌『月刊仏教保育カリキュラム』に、平成七年四月号から「やさしい仏教入門」という内容の連載を担当した（平成八年三月号まで）ことからです。私が勤務しておりましたのは仏教や宗教的な背景のない短大ですから、お恥ずかしいことですが、保育や幼児教育と仏教に接点があるなどということについては、それまでは全く考えなかったがありませんでした。

その連載がきっかけになりました、『月刊仏教保育カリキュラム』には、仏教や保育に関する一年間の連載原稿を五回ほど掲載させていただきまし、日本仏教保育協会が主催する研修会や隔年に開催されている全国大会で、講師や助言者としてもお手伝いをさせていただいております。さらに、平成十年四月から二十七年三月まで、鶴見大学短期大学部保育科と専攻科で非常勤講師として必修科目の「仏教保育」「仏教保育特論」等の授業を担当させていただきました、そのほかにも、仏教系の幼稚園や保育園・認定こども園で職員研修や保護者を対象にした講演等でお話しさせていただいております。本日のシンポジウムでは、そうした経験をふまえて、保育や幼児教育と仏教の接点についてお話しさせていただきたいと考えております。

初めに申し上げましたように、大学に入学した当初の私は、仏教に全く興味を持っておりませんでした。けれども、現在は、仏教は「人間がどのように生きてらよいか」（どうしたらせつかく授かった自分の「へいのち」を全うできるか）ということに対して、現代のどの学問よりもすばらしい「客観的で普遍的な」羅針盤になり得ることを確信しております。というよりも、仏教の人間観や生命観を土台にしなければ本当の保育や幼児教育はあり得ないとさえ考えるようになりました。それをお示ししましたが「仏教に学ぶ保育の原点」というタイトルです。

## 二、幼稚園教諭・保育士・保育科の学生等と接して感じたこと

まず、鶴見大学で保育科の学生さんに「仏教保育」（専攻科では「仏教保育特論」）の授業を行って感じたことから話します。保育科の学生さんですから、「保育」について学ぼうとしていることは当然です。卒業後に幼稚園や保育園・認定こども園などに就職するためには、幼稚園教諭の免許や保育士資格が必要ですから、保育科における授業の多くはそうした国家資格を取得するための必修科目に指定されています。

ところが、「仏教保育」（仏教保育特論）の授業は、大本山總持寺を設立の基盤とした鶴見大学独自の必修科目です。もちろん、このような科目の位置づけは、どの大学でも建学の精神にもとづいて行われていますから、鶴見大学に限ったことではありませんが、幼稚園や保育園・こども園の先生を目指す学生にとっては、「なぜ、保育者になるために仏教の勉強をしなくてはならないのか」と疑問を抱いて、前向きに取り組まない傾向が見られました。

こうした考え方は、学生にだけ見られることではないように思います。日本仏教保育協会（加盟園一〇八九園・平成二七年現在）以外にも、仏教各宗派に関係する幼稚園・保育園・こども園が加盟している団体がありまして、その合計は約二九〇〇園（『わかりやすい仏教保育総論』チャイルド本社発行 平成十六年版による）になりますが、日本仏教保育協会に加盟する園は減少傾向にあります。また、各宗派で開催する研修会への参加者もあまり多くないと感じられます。その理由は、研修会において保育と仏教の接点を十分に示すことができないからではないかと私は考えております。

### 三、保育と仏教に接点はないのか

先ほども触れましたように、私は保育や幼児教育に仏教の教えを取り入れることは非常に大切だと考えております。と言うよりも、仏教の人間観や生き方を土台にしなければ、人間を本当に人間として育てることができないのではないかとさえ考えております。と申しますのは、これまでの二十年間、日本仏教保育協会の研修会や鶴見大学で授業を担当する中で、保育や幼児教育と仏教は〈へのち〉という共通のキーワードで強く結ばれていることを確信するようになったからです。

実は、保育という言葉には、乳幼児の未熟な〈へのち〉を保護するという意味と、その〈へのち〉が自立して生き

られるように教育するという二つの意味が含まれています。

ここで、未熟という表現に、少し説明を加えておきますが、ポルトマンというスイスの動物学者は「人間は生理的な早産である」と言いました。それはなぜかと申しますと、人間の新生児は自分の頭を支えることもできない状態で誕生し、その後も自立して生活できるようになるまでには多くの時間が必要で、これは人間以外の哺乳類と大きく異なる点であるためにそのように言ったわけです。これに対して、牛や馬などのほ乳類は生まれて数時間もすると四本足を踏ん張って立ち上がり、自分でお乳を飲もうとしますから、人間の赤ちゃんとは大きな違いがあります。そこで、私は「保育」のキーワードをへいのち〈を保護して育てる〉と考えるわけです。

これに対して、お釈迦さまが説かれた仏教というのは、自分や自分以外のへいのち〈と向きあつてその本質を探究し、終わりが来るまでの時間（しかも、その時がいつ来るのかは自分でもわかりません）を悔いのないように生きるための道標とすべきものだと思います。言いかえますと、仏教はへいのち〈についての真理を示したもので、そのことは「仏陀の教え」の短縮形が「仏教」であることから伺い知ることができるでしょう。仏陀という言葉はインドの言葉であるBuddha(人間についての真理を発見した人)を、仏教が中国に伝えられたときに仏陀という漢字で表現したものです。しかも、次の【仏教と保育の関わりについての補助資料】で示しましたように、仏教で説いている人間についての真理は、仏教徒だけでなく、すべての人にもあてはまる真理であると言えるのではないのでしょうか。そこで、次に【仏教と保育の関わりについての補助資料】を示しておきます。

#### 【仏教と保育の関わりについての補助資料】

仏教を理解するためのキーワードはへいのち〈の姿〉を知って幸せに生きること

仏教は、お釈迦さまによつて説かれた「私たちがかぎりあるへいのち〈を幸せに生きるための教え」です。

お釈迦さまは釈迦国の王子として、インドとの国境に近いネパールで誕生(紀元前四六三〜三八三頃・別の説も

あります)し、子どもの頃の名前をゴータマ・シッダールタと言いました。

王子としてのシッダールタがお坊さんになった理由は、自分ではどうすることもできない生老病死の問題を解決するためでした。そのため、お釈迦さまは、生老病死の悩み(四苦八苦)から解放されて「幸せに生きたい」と考えて、二十九歳の時に出家して、修行の道を選んだのです。

そして六年間の修行(勉強)の結果、三十五歳の時に「お悟り」を開きました。悟りを開いた人のことをインドではBuddha(ブッダ)と呼びました。Buddhaという言葉は「人間のへいのち」についての真理に気づいた人」という意味です。

悟りを開いた後は大勢の人々がシッダールタのもとに集まって、「自分がどのように生きたら幸せになれるだろうか」ということについて一緒に勉強するようになり、その人達から「お釈迦さま」と呼ばれて、尊敬され慕われました。

お釈迦さまの教えを仏教と言います。仏教は「buddha(仏陀)の教え」の「仏」と「教」をつなげた表現で、インドのBuddhaという言葉を中国に仏教が伝えられたときに中国の文字(漢字)で表現したのが「仏陀」ですから、仏教というのは「へいのち」についての真理の教え」ということになります。

お釈迦さまが気づいた「人間のへいのち」についての真理」とはどんなことでしょうか？

① 天上天下唯我独尊(誕生偈) 〓世界中の誰のへいのちもたった一つしかない尊いものです。

そして、誰のへいのちも比べて序列がつけられないものです。

② 私たちのへいのち<は絶えず変化しながら生きていて、誰にもいつか必ず終わりの日が訪れます(諸行無常)。

③ わたしのへいのち<は、自分一人の力で生きているのではなく、多くの人や動植物のへいのち<と関わりあって生きている(生かされている)のです(諸法無我・縁起の教え)。

④終わりの日が訪れるのはいつなのかわかりませんが、その日が来るまでを精一杯に生きることが大切なのです（涅槃寂靜）。

そこで、次のような心構えを説かれました。

①自分の〈いのち〉も自分以外の〈いのち〉も大切にしましょう。  
②終わりの日がいづつ来ても後悔しないように一日一日を精一杯生きましょう。

③みんなで関わりあいながら一緒に生きているのですから、お互いに思いやりの心で生きましょう。そして、お釈迦さまは一日一日をよりよく生きるために次のような教えを示されました。

八正道（はつしょうどう）苦しみから解放されるための八つの心がけ）

- ①正見（しょうけん）素直な心で人に接したりものを見たりしましょう）
  - ②正思（しょうし）独りよがりの考えをしないようにしましょう）
  - ③正語（しょうご）相手の気持ちを考えて話しましょう）
  - ④正業（しょうごう）自分勝手な行動をしないようにしましょう）
  - ⑤正命（しょうみょう）たつたひとつしかない〈いのち〉を大切にしましょう）
  - ⑥正精進（しょうしゅうじん）自分がなくてはいけないことにしっかりと取り組みましょう）
  - ⑦正念（しょうねん）いつも理想に向かって努力しましょう）
  - ⑧正定（しょうじょう）静かに自分の心と向きあう時を持つようにしましょう）
- 六波羅蜜（ろくはらみつ）社会生活を営む上で大切な六つの心がけ）

①布施（ふせ）人のために行動するようにしましょう）

②持戒（じかい）約束や決まりを守るようにしましょう）

- ③ 忍辱（にんにく〓思い通りにならなくても我慢するようにしましょう）
- ④ 精進（しょうじん〓目標に向かって努力するようにしましょう）
- ⑤ 禅定（ぜんじょう〓心静かに自分の行動をふり返るようにしましょう）
- ⑥ 智慧（ちえ〓正しい考え方を身につけるようにしましょう）

#### 四、鶴見大学における必修科目としての「仏教保育」への取り組み

ここまでお話ししてきましたことから、仏教と保育はどちらも「いのち」という共通の課題があることがおわかりいただけたと思います。ですから、仏教保育を学習する目的は、私たちの「いのち」がどれほどかけがえない尊いものであるかをしっかりと踏まえて、子どもの「いのち」をしっかりと守りながら、一人ひとりの「いのち」が最も望ましい方向に育つように援助することなのです。言いかえますと、保育を学ぶ際に仏教の考えがいかに重要であるかということに気づいてもらうことと、仏教の「いのちの教え」を実際の保育活動に生かせるようにすることなのです。

そこで、保育科の学生さんに気づいてほしい要点を次のように示しました。

- ① 私たちの「いのち」がいかに得がたいものであるかということ。
  - ② どの「いのち」も一つしかないこと（人間はもちろん、動物や植物も含めて）。
  - ③ どの「いのち」も永遠には生きられず、いつ終わるかもわからないこと。
  - ④ 私たちの「いのち」は互いに関わりあつて生きていること。
- ですから、保育活動においては次のような子どもを育ててほしいと伝えてきました。
- ① 子どもが一日一日を精一杯に生きようとするように育てる。

②子どもがお互いに感謝と思いやりの心で仲良く遊べるように育てる。

そして、授業の中では「お釈迦さまの教えを学ぶと、一人ひとりの子どもの身体や心を本当に大切にしたい保育ができるようになります」と、くり返し話してきました。その結果、十五回の授業を終える頃には、多くの学生が仏教保育の授業に主体的に取り組むようになったのではないかと考えています。そこで、十五回の授業を終了した後の感想をいくつか紹介しましょう。

①この授業を受けるまでは、仏教保育とは仏教の教えを子どもたちに押しつけるような保育だと思っていました。が、生命の尊さを教える保育だということを知り、すぐくよい保育の仕方だと思いました。また、保育にかぎらず、私自身もふだんの行いを正そうと心がけるようになりました。

②最初は仏教と保育のつながりなど全然わからなかったが、講義を聞いていくうちに「いのち」という大事なテーマが見えてきた。保育をするに当たって、技術面など大切なことはたくさんあると思うが、「いのち」を大切にするとどう仏教保育の考えはどんなときでも持ち続けるべき根拠のようなものだと思う。

③最初は宗教ということに多少抵抗がありました。けれども、授業を重ねるごとに、仏教保育は素晴らしいものなのだと感じ、もっと知りたい、深めたいと思うようになりました。命を大切にすること、その命の個性を引きだして伸ばすことの大切さなどいろいろなことがわかり、この授業を受けて良かったと思います。

④仏教保育を学び、保育にとつて仏教はとても大切だということがよくわかりました。なぜならば、仏教を通して子どもたちにとればど命が大切であるかについて伝えることができるからです。私自身、この授業で一番すごいと思ったことは七〇〇兆分の一の確率（筆者注）授業では七百万個の卵子のうちのひとつと一億個の精子のうちのひとつが受精して人間の生命が誕生すると説明している）で私が生まれてきたということを知ったことでした。だから、今こうして生きて、幸せでいられることを大切にしていきたいと思っています。

⑤ 仏教と保育の結びつきが、初めはまったくわからなかった。仏教系の大学だからこじつけだと思っていたが、授業を通じて「人間」「いのち」ということについて深く考えました。そしてその考えが自然に保育につながり、子どもの心をいかに育てられるか、豊かな人に成長できるように保育をしたいと思うようになりました。仏教と聞くと堅い印象がありましたが、考え方がすごく変わりました。

⑥ 私はこの授業で命の大切さを学びました。お釈迦さまが教えたことは、じつはとても簡単なことで、誰もが気づいていなければならないことでした。それを人は忘れていて、今回の授業で思い出すことができました。私自身が生きるために他の命が消えているということにもこの授業で気づきました。私が生きるために犠牲になつたものに対して深く感謝し、これからもこの気持ちを忘れずに生活していきたいと思えます。生きる意味を考えさせられ、たくさん大切なことを学びました。

⑦ 仏教保育は仏教を取り入れていない幼稚園や保育園には関係のないことだと思っていました。しかし、授業を受けてみると、私たちの生活で忘れてはいけない大切なことはすべて仏教の教えに基づいているのだということがわかりました。特にお釈迦さまの教えは、私たちが生きていく上で当たり前であると思われることを根本から考え直させてくれるものばかりでした。

なお、その詳細については、拙稿「仏教保育に対する保育科学生の意識変化について」（鶴見大学仏教文化研究所紀要第十三号 平成二十年四月発行）を参照してください。

## 五、保育（幼児教育）と仏教の接点を考えるもう一つの重要な視点

ここまでお釈迦さまの教えを「いのちの教え」として考えてきたのですが、あと二つ重要なことを話し忘れていた

ことに気づきました。その一つは、人間を理解するためには「中道の教え」を忘れてはいけないということです。

お釈迦さまの教えである仏教が「人間（いのち）」についての真理の教えであるならば、人間を正しく理解するために中道の概念も非常に重要です。中道という教えは、「苦行にも快樂にも偏らない」というお釈迦さまの立場を示した言葉とされていますが、人間の身体や心に注目しますと、その意味するところの重要性が明確になってきます。そして、中道は仏教的な世界における概念に止まらず、生命の営みの根本的な原理であり、緊張とリラクセスの調和を図ること（二拍子のリズムを保つこと）が心身の健康を維持するだけでなく、正常な判断力や活動を維持するために不可欠であることがわかってきます。

例えば、生命維持の根底としての心臓を例にあげますと、心臓は一日に十萬回も拍動をくり返して血液を全身に循環させています。そして、そのリズムは収縮（緊張）と弛緩（リラクセス）の二拍子です。また、人間が生きていく上で不可欠な酸素を体内に取り入れるための呼吸も、呼（はく）と吸（すう）とを交互にくり返していることがわかります。さらに、より複雑な営みとしては、人体の恒常性を保つ仕組みとしての自律神経が交感神経と副交感神経の絶妙な調和によって私たちの生命活動が維持されていることが知られているでしょう。

このように考えたときに、私は、現代人が大きなミスを犯していることに気がついたのです。そのきっかけは、最近の学生と接して学習意欲が低下してきたと感じたことと、鶴見大学附属幼稚園における園児の坐禅研修の成果について、三松幼稚園の前園長先生からうかがったお話（坐禅をして静かな時間を体験するようになってから、子どもたちが積極的に遊ぶようになったという内容）です。

こうした視点からまとめたのが、日本仏教教育学会が学会創設二五周年を記念した論文集『仏教的世界の教育論理』（法蔵館・平成二十八年十二月発行）に掲載した「幼児期の人間形成と仏教・・・身体活動の持つ教育的な意味を中心に・・・」で、私は幼児期における遊びやお手伝いの重要性についての考えを示しました。さらに、平成二十八

年十二月に愛知学院大学で開かれた日本仏教教育学会の第二十五回学術大会でも「現代教育の盲点と仏教教育 …… 幼児教育におけるお手伝いの意味…」として、身体を動かすことの教育的な意味について発表しましたので、詳細につきましては発表要旨集を参照していただきたいと思いますが、そこで強調したかったのは「現代の子育てや教育が知識至上主義に陥って、身体活動を軽視していることに対する警鐘を鳴らすこと」でした。これが二つ目です。私たちの〈いのち〉は、身体と心が相互に密接に関わりあつて営まれています。それにも関わらず、現代の教育は知識至上主義に陥って身体活動を軽視してののではないのでしょうか。

その考えを裏付けるように、幼稚園教育の基本を示した「幼稚園教育要領」には、「幼児期の教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なもの」と位置づけられていて、「幼児の自発的な活動としての遊びは、心身の調和のとれた発達の基礎を培う重要な学習であることを考慮して、遊びを通しての指導を中心として」と示されています。このことは、保育所保育の基本である「保育所保育指針」においても同様に示されているのです。

一般には遊びと言いますと、いわゆる「お勉強」とは対照的な位置づけをされているように考えられるかもしれませんが、それは誤りなのです。お友だちや先生と遊ぶことによつて、幼児は人として生きていく上で大切な「努力する心」「やり遂げる心」「協力する心」「我慢する心」などが養われるだけでなく、より早く、より上手に、より楽しく、といった「工夫する力」や「さまざまな知識」も育まれる（お勉強の成果につながる）のです。

このように考えてきますと、都市化や核家族化が進んで、〈いのち〉の本来の姿が分からなくなつてしまつた現代社会において、（人間についての）真理の教えとしての仏教が担わなければならない役割は、ますます重要なものになつてくるのではないのでしょうか。以上で「仏教に学ぶ保育の原点」と題した基調講演を終わらせていただきます。なお、これまでに私が仏教と保育の関連について書きました論文の一覧は『仏教的世界の教育論理』（法蔵館…平成二十八年発行）に記してありますので参照してください。